

復活に かける^③

福島県内に1方4000人、県外に60000人。東京電力福島第1原子力発電所事故の影響で浪江町を追われ、今も避難生活を続ける町民の数は。震災が起きた2011年の夏。同町からの避難者が多い二本松市の駅前が開かれた盆踊り会場には3000人が集まり、避難先から駆け付け、再会を喜ぶ人であふれた。「皆、生まれ育

大震災から3年

離散した町民の心をつなぐNPO法人 神長倉 豊隆代表(福島県浪江町)

「った浪江が好きなんだ」。その姿を見て、祭りの開催に尽力した神長倉豊隆さん(63)は、町民の思いをつなぐ活動に取り組もうと決めた。

原発から7キロ離れた商店街で、生花店を営んでいた神長倉さん。ピーク時は年商が1億円を超える盛況ぶりだった。だが原発事故が仕事を奪った。「働き口がなければ若い人は生きていけない」。店を一緒に切り盛りしていた長男の家族は

関東に転居させ、孫3人に囲まれる生活は終わった。当時の記憶をとどめている

「戻る日」見据え奔走



生活再建を目指す町民と話し合う神長倉さん(右)。相談内容は家族や健康問題、復興計画とさまざま(福島県二本松市で)

「まちづくりNPO新町なみえ」の代表を務める。昨年度は東北を中心に全国40カ所で避難者の交流会を開いた。町民と相談を重ねて作り上げた町の復興計画も説明、一時帰宅に向けた交通手段の整備などを盛り込んだ提言をつくった。

今月、その提言の一つが実現する見込みだ。県内の避難先から浪江町に向かう「みらい号」という乗り合いバスが走る。車を持たない高齢者らが気兼ねなく暮

も、神長倉さんは「戻る日」に向けて活動を続ける。「自分の花束でお客さんが笑顔になるのを、また見たいからね」。浪江が再び花開く日がきっと来る。そう信じている。

今は、二本松市を拠点に町の復興を目指す特定非営利活動法人(NPO法人) 若者の思いもくみ取る。

参りや自宅の様子を見に行